

小
精
話
録

為問龍筆

特 別

14

1919

736



特
1919
114
736

小精活録



一 最も大なる真理は最も単純なる

一 単純は常に最も感得するもの

一 証據の最も確たるもの

一 真理の最も善い修飾の最も

紙をよむある

・ 字紙は常に人の心を魅す、児童
や動物もその心を魅すのは其
為なりある

・ 天地に柱々、最も大なる

大なる心は、
あるものである

・ 吾人の心は、人の心を

ものの自分の心ある所謂、愉快
思ひをさす、すすむこと、即ち

他人の紀程をいふには、頗る困難
のようだ

「何さ、さう自分と他人は、何さ
少く、か自分の方を拂いぬ

「自己の力をいふと、勢ふ、さうと、思ふ

の力をいふと、さう、怖い、よと、思ふ
に、結構、す、と、思ふ、必要、さう、寧ろ
あ、さ、大に、結構、す、と、思ふ、か、い
・ 考へ、必要、の、さう、す、柄、を、いふ、す、と
ま、い、考へ、必要、の、あ、る、す、柄、を、いふ、

すと、歿し曰し位に重あがき

一 思想は自由のやうに思はんが併

一 其の人間の内部より、思想の

支配することの出来、思想の程

力ある何物かに存在するが

一 此の思想の人の心に在るもの

る、彼をともつて未来の思想心に

自由を與ふもの、彼は其所に在る

ることを止めて一歩進むもの

一 此の思想の心は僅か三人の心に

對して十五の部屋が設けられてあり、
かもあそびを泊るをも暖をとるをやるこ
とが出来たのであるが、人に引換る能
のところで九人二間の畳草か念
七人の人間かつてもあつた、彼等は

まづ旅の漂泊者を迎へ入れたが、
一息をうけ、自分も物御えが来るは、
他人がかりく怒るのを待た、人を移
るに親おもしろいすが（セリカ）

一 自己及び他人の善い悪を大切に必要

人間の仕事——人は五人が其結果を
果てることの出来る諸の仕事
である（ラスキン）

人間の諸の行為は凡て結果を
て現るる時分が速く距つてある

やがて立派な素明——なる数
をよき行為の如く（ラスキン）

一つの創造——そのあるは雨を思ふ
る雨雲のひと——

一夜の間、天より光を照るやうな

世のふが人生の凡ての意義を啓蒙す

る (トロオ)

一 輝の入に鏡は鈍い音を出すふえ
を二つに割る (ば) 再び清い音を
出すふえある (じやいおん
りうえん)

一 夢を世界で為さんね 最も有害なる誤解
は政治をも道徳をも分つたことを
ある (じえ)

一 生命のふいふ内の保保も素直
の方がいい

一 吾々の殆んどする所の支出は他人に負

担んが為めんとせんてある (エマソン)

一 我々百姓を愛する、彼等は曲つた利

益をも、我々存分に受けることもつてある

いかゞある (モリテニーユ)

一 吾人は彼の為め吾々も其の熟するの

うちは幸福である、そんなが熟する時

吾人は吾々も其の熟する (トマス・ペー)

一 奇怪な事だが、いかに時代は吾々

ハ自分達の機にいらる、宗教とる

徳と祖国を奉仕するのと云ふ一面
をかぶせようとして来たのである (ハイム)

一 吾人の生活は肉体的なものから精神的なもの
へ移動するにば、やゝ苦痛を要する。死が恐ろ
しく、さうして来る完全な精神生活に

終焉する人にとつては、此の恐怖はあ

り得るものである (マルクス、アウエルスマン)

一 愚かき人間は沈黙してゐるが、一考して、
併しさういふことは出来ぬ。それ
の愚かき人間はさうである (アサ
ナヒ)

一 呷の舌は嚙つきの舌どうもしだ

一 藝術の価値と科学の価値は、高

人の利益への和悲を多く奉仕に存す

コ (ラスキン)

一 左手も右手の為する事を知らさ

ス (アムステルダム)

一 人からよく言ひぬがいを教する事、自分

のい、所を並べ立てる事、
バ (ラスキン)

一 生(の道)に居るが、人々多くは此

の居る所を知らず、死(の道)を歩む

道(ちのど) (ゴゴリ)

・ 河が北の世に生れ出た時河に注ぎ、河
の南国の凡そ人は老んだ北の世を去
る時にも、老んちうも、河の南国の
凡その人へ注ぎ、河を微笑ちやうと

すむかよ (ゆたの風)

・ どの人へも何れもあつた人
こそ最もあつた人問ひあふ

・ 他人へも多くを許し自分へも
許すもあれ

・宇宙の満足は貧者の涙によつて
得らる

・生物の無様おそれるものあり
所以は、その地球の引力のお
勝つ力あるのみ（レヨウペンハラエ）

・天才は理を鏡より遠きを望む
にも、その心と観念（高）と
・愛にも若く風を空の美を増すこと
も、人は神祕はよく宇宙の
味を増すものなり

一 現世界にいろいろ奢侈の十分の一
は他人の評判を気にするもの
つものむ(じょうやごはらえん)

一 藝術は口に言ふべからざることを綴
するものなり(グレート)

一 光のち人間の心の奥底に透ることを

是れ藝術家の職なり(レニエーマン)

一 單純の模倣は美術にならば必ず
何等の結果を生ぜず、吾々が他人の
倣ふものとは異なり、吾々が内部より入

リ更めて再生し来ると要す (じふさいざい)

一 あらわれ望は満足にふて鎮ま
があらわれ望は満足にふて増

大す (アミエ)

一 あらわれ新なり望は新なり欠乏

の始りであり、新なり望の若くは

あり (ウランデー)

一 情望の収録は収録のうちにあり

いぬ録であり

一 急げとの頭は悪魔の心なり

ふ場所である(ゲート)

一 秘中の最も秘密なるものなりや

曰く公開の秘密なる(ゲート)

一 復讐に死に克つ、志を死に死を斬るが
名譽は死を希ふ、悲哀は死を奔る

恐懼は死に先立つ(ゲート)

一 法事を終ふ、よる自らを終ふもの

さう(カーテン)

一 罪は歴史を書き善は黙然たり(ゴエテ)

一 貧者の貸す者、利子を神に貸す

一 戦場に在りて勝を得る人も、敗れ入

りて大敗するも勝を得る人もある (カーフ井戸)

一 浪費者の子孫の物は盗み吞み家は

自身を盗む (英訳)

一 金を借りに行くよりは、利を取らん

くものちう (蘭訳)

一 主人の眼と足と口は、最良の肥料也

一 錠をおろし、固く守る、さうする誰

れか其守る者等を守るべきぞ (レブス)

一 其の英雄あるものは自ら其英雄なる

こともわらう七のさう (カアラール)

一 元んとおするものは翼伏し、奮んと欲
する者は足踏し、抱えんと欲するものは口
黙す (信地経)

一 梁肉を喫するの口より苦きいさゝ金冠
を戴く頭より危きはさう七寶を衣

きふさふさいさう七のさう (カアラール)

一 人間を動かさん二箇の横杆あり曰く恐
怖曰く利益 (ナボシ)

一 富家の未亡人は一眼を以て泣き、一眼
を以て笑ふ (菊池)

一 若し人あり其口に杖を然りと云ひ目に杖
を舌と云はく其口を信せしめて其目を
信さく (エメン)

一 若き妻は老夫を墓に送るの驛
馬也 (馬也)

一 心の師と云ふも心を海とす勿れ

一 其たひか思ひ定むをかくらん頼む
まじきはつらなり

一 世はうめさうと得たる不幸程
不幸なればなり (エメン)

一口飲みきり、温かい言葉は婦人の顔上の
装飾でも

一人か、獨にうなづくことも、常々自
分を呼ぶ神の聲が、まもなく、と、
やうにうなづく

一思慮との病、氣は肉體上の病
氣よりも、殺人の病、そして、おれは、
逢着さん（こせき）

一良心の要求、抗、難い、それは、神
の要求だから、即時従わなければならない

● 利己心は傲慢の始まるもの 傲慢

— 是は抑へ切らうい 満面の利己
心ぢやう (いんまう)

● 美しき人間は富裕な人間

— 是く而も不安な世に天を
(せう)

● 清く正しくいふは人の心はるる無

ところの清く習慣に迎合するす—

正しくいふ事に對して清くいふは

大に大切な時間な事な 清くの本心

の清く正しくいふは清くいふ—

こゝろ事にかづらるゝ限り、さうい
下しぬ取らるゝ是らゝの仕事に託るゝの
最良の能力の浪費せらるゝ事は政を
言ふまでもないが、更に其の定めの誤り
か、何らうゝ存在であらうかを識る事

さへ、實に困難である、さういふ生活
は、實に肉を減すのだ(エマソン)

● 吾々の最も大きな不完全は、吾々の
内的洞察能力にある、吾々は他人の心の
所を見つゝゝんは、恐ろしく遠く見が

きくけれども吾々の目の正しき所は
吾々に見えぬものなり（ブラウニング）

一 美しければ美しいほど美人はますます
凶悪というけれども、婦人の凶悪
はよくても自分の美が益々出す害

を抵抗することが出来ぬのだ（レスリング）

一 足の車輪は常に音を立てて軋む
空も物はちくちくつらつら。傲慢の
本性はかくの如きものがある。

一 傲慢と人間の価値や花の認識

といふ金銭に依る傲慢は外的成りの
連れを増大するが、自己の人間として
の價値を其の認識は及ぶ外
の底に於て増大する（佛の教を）

● 骨がくす皮を誰か迷ひけり美

人といふ皮のわさささ

一 外より来る盗人に防ぎあふ限り

心の中へ盗人

● 空かいては穢はうがく人の身が重
くろく程のちあつさ

一 代の守本なるがぬば我の人

ともし飯とけしう

一 我庵はち天井に地のむしろ月日

をちちう風をちばうき

一 追善に伽羅をたうう釜のふゆれや

けちちやする

一 心をも退く人と弱しと思ふるよ

ちちの力の強きあう

一 石は冷たいものだとはいふ後だが

夏も熱いよは名ひ

一 人は人に對して何時とも誰一人
で居る時最も多くの人と對する

一 自らはどうか行動を鈍くせうが
自者の裏付けられてある行動
をいふはさう

一 人の受る感動は目前に及ぶを以て
最も鋭く

一 見るより聞くことより見るより十倍の利
がある人は目の客に軟弱さ
よや見ることは則信仰する人か

耳に鳴る多くは是れ欺聞を

一 大膽の中より大カチめはちと

如めふ事す 必ず成る (チーチ)

一 見るがらに筆をよそを書くこと

はじの根とぬきぬき

一 鉄を腐さすは摩つて耗すを可

し (はくさくしん)

一 世の中の人と物さるゝあは烟

とろろと後れ ●こそむ

一 洪徳の言は唯一無償の寶ん

之を為りて后妃も市人の妻と競ふ

さうをぬす (いふこと)

一人の心も死の恐怖を打勝つことを

弱き者なり (いふこと)

一愚者の心は口中うなり、智者の口

は心中にあり (いふこと)

一自己の理性を使ひて勇氣をお

こすは教化のめえあるのむかし (いふこと)

一天国の垣根見するに地土の人より許

せんずきと幸福なる家庭ハその

天国の入口にこそあれ

一 愚劣なる書籍は智慧の海に比
べず漏穴の如き船のこと——(ホムズ)

一 利の便を以て善と爲すは、
陰謀の如き、亦も何んぞ善といふ

その陰謀が利の便に於て、善と爲す
公共の幸福の爲と爲さるゝといふ
ふいふ、是れ思ふことなり

一 行為が複雑な理窟に於て、
人の如く、善と爲すといふこと

良心の決定は直截で簡單なるもの
である（トマス・ヘンリー）

一 直に偉大なる事業はすべて餘りの

目にええぬゆゑとてつて達成せん日
（セシル）

一 女は母の愛を若く娘に見が為めしつ

男性に對しそ恋を乞ふと乞ふ

一人と交はるの危険は言葉をかへし

は時をくぬきぬき

一 人間かもしる能力は無限とも云ふ得

るか自己の性質と如浸る常の邪魔

もと結方の若辰を辞退する

一言を許す人の強い人である

婦人にも美は時に武急である

玩具

昭和十五年十一月五日
と起し四方書畢

春城病中

